KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

「人権を学ぶ意義」：学生の姿から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2018-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浦嶋, 敏之 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/7828

「人権を学ぶ意義」
～学生の姿から～

英語キャリア学部教授　浦嶋敏之

１．はじめに

2018年の年明け、世界的な株価上昇からはじまり、経済会のリーダーたちからは力強い発言が続いている。一方、報道を通じて聞こえてくる庶民の声は、格差の拡大、テロや核をめぐる国際緊張など、世界的な調和の崩壊を不安視するものが目立っている。また近年、環境問題等、国単独レベルでは解決できない課題が山積しているのも現実である。

これからの時代を担う若者には、このような予測不可能な時代を、地球に住む運命共同体である地球市民としてどのように生きるかが求められている。社会のグローバル化が進み、人や物、情報等が国境を越え行き交っている中､世界の人々と相互理解のもと持続可能な社会を実現していくためには、英語を使いこなす力やICTを活用する力に加え、人権についての確かな知識と実践力を身につけることが不可欠である。

日本では、これまでから義務教育段階や高等教育を通じて人権教育について様々な取り組みが行われてきた。今回は、大学生として人権を学ぶ意義を2017年度人権問題論を受講した学生の姿から考えてみたい。

２．人権教育の経緯

まず、今の学生たちがくぐってきた人権教育の在り様について簡単に触れておく。

国連総会において世界人権宣言（1948）が採択されて以降、あらゆる差別や人権侵害を全世界からなくすための取り組みが進められているところである。特に、人権が尊重される社会の実現のためには人権教育の充実が重要で

あるとして、「人権教育のための国連10年」（1995-2004）が取り組まれたことは、人権教育にとって大きな意義があった。

同行動計画では、「人権教育とは、知識と技術の伝達及び態度の形成を通じ、人権という普遍的文化を構築するために行う研修、普及及び広報努力」と定義している。この「人権文化」という概念が、人権学習を「差別はしてはいけない」という禁止的なメッセージとしてのみ受け取るのではなく、「人権文化を創ろう」という創造的なメッセージとして受け止める契機となった。そのことにより、人権文化の担い手として、学習者自身の実践力を高めることが大切にされるようになったと考える。（現在は、国連「人権のための世界計画」2005－終了時限を設けず）

研究機関・団体や学校現場では、「カ（硬い）キ（きつい）ク（苦しい）ケ（権威的な）コ（困難な）から、ア（明るい）イ（いい気持ち）ウ（うれしい）エ（笑顔）オ（おもしろい）学習へ」という合言葉と共に、一方通行ではなく双方向のやり取りのあるいわゆる参加型学習が提唱され、フォトランゲージやロールプレイ等様々な学習手法が開発された。

当時、人権にかかわる主体的な学びが生まれるという期待感と同時に、人権侵害そのものに焦点が当たらず、人権教育のめざすところが曖昧になってしまうのではないかという危機感もあった。しかし、学校現場では、これまでの「聞き取り」「フィールドワーク」「生活つづり方」等といった従来の学習手法を大切にしながら、参加型学習の考え方も取り入れ、各地域の実態に応じた取り組みをスタートさせた。

このような流れが一定学校現場に広がった時期に、義務教育をくぐってきたのが現在の大学生世代である。各学生のそれぞれの地域で学んできた人権学習が、大学での学びにどうつながるのかも含め、「大学で人権を学ぶ意義」について学生の姿を通して考えてみたい。

３．人権問題論の概要

はじめに述べたようなグローバル人材の育成という社会的な要請による人権教育の必要性とともに、今の若者の現状からもその必要性が考えられる。

「高校生の生活と意識に関する調査報告書」（平成27年８月：国立青少年教育振興機構）によれば、「自分はダメな人間だと思うことがある」の問いに対して、日本の高校生は、「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した割合が72.5%と高く、米国（45.1%）、中国（56.4%）、韓国（35.2%）を大きく上回っている。また、社会参画意識についても同様の傾向がある。（この時の調査対象の高校生が現在の大学生世代である。）謙虚さを美徳とする国民性を差し引いてもこの差は気になるところである。

このような日本の若者の自尊感情や社会参画意識の低さはこれまでからも指摘されているところであり、この状況も踏まえて本講義の到達目標を次のように設定した。

１．差別と偏見について、そのしくみを理解できる。
２．人権問題について理解を深め、その課題と解決の方向性について説明できる。
３．自分自身の持ち味（特性）を理解し、それを生かした解決方策を探り行動につなげることができる。

また、これまでの人権学習の経験値に関わらず、すべての学生が授業に参加しやすいように、今日的な人権課題や暮らしの中での様々な人権問題について、基本的な知識の習得⇒活用（議論）⇒表現という学びのプロセスによる学習形態をとった。その際、多様な考えを尊重しながら、理解を深め・高め合うという姿勢を大切にし、それぞれの自分自身の“持ち味”というものを意識させるようにした。

講義の流れとしては、まず、「自分の持ち味」を考えることからスタートし、固定観念から偏見が生まれ差別へとつながっていく「差別の仕組み」を考える。それをベースに「個別の人権問題」について意見交流を行うというスタ

イルで進め、最後にもう一度自分自身について考えるという流れになっている。

「個別の人権問題」は、比較的身近で共通の土台で考えやすい「女性の人権」、「子どもの人権」から入り、「障がい者」、「高齢者」、「外国人」、「部落問題」など日本社会に内在する課題へと展開していく。そして、「医療」、「大震災」、「平和」など命に直結する問題を考え、終盤には、環境問題やインターネット、労働などの今日的な問題について、自分自身の持ち味を生かしてどのように向き合うかという構成になっている。

＜テーマ一覧＞

自分の持ち味①	外国人と人権（在日韓国・朝鮮人）
差別と偏見について（差別の仕組み）	外国人と人権（帰国渡日児童生徒）
人権文化の創造とは	ハンセン病と人権
女性と人権①	医療と人権（HIV感染症等）
女性と人権②	いのちの尊さ（臓器移植と赤ちゃんポスト）
子どもの人権①（いじめ問題）	性的マイノリティと人権
子どもの人権②（児童虐待、不登校）	震災と人権
子どもの人権③（少年と犯罪）	平和と人権
子どもの人権④（貧困問題）	環境問題①（公害問題）
高齢者問題と人権	環境問題②（持続可能な社会）
障がい者と人権①（障がい者の自立）	インターネットと人権
障がい者と人権②（ともに生きる）	労働と人権（働く人の権利）
同和問題①（歴史、意識、実態）	人権教育について
同和問題②（解決への取り組み）	国際社会における人権
アイヌの人々と人権	自分の持ち味②　まとめ　ふりかえり

４．人権を学ぶ意義　～学生の姿から～

（１）それぞれの人権学習（人権学習の現状）

私がこの授業で驚かされたのは、大学生が持つ社会問題の認知の低さだ。HIVが遺伝しないことなんて小中高校でしっかり学んだはずだし、特に同和

問題は、自分の身近な問題だったので「初めて知った」という意見を述べた学生にゾッとした。もし、彼らはこの授業を受けていなかったら、無知のまま社会へと出ていき、もしかすると知らない間に人を傷つけていたのだろう。なぜ、同じ月日や年代を生きているのに、育った環境でここまで差があるのだろうか。国語、算数…なんかより学ぶべきことが抜け落ちていることにあきれてしまった。

しかし、これらも“普通”は誰でも知っているという、私の内の“普通”という“固定観念”が引き起こしている差別なのかもしれない。自分の内で測るのはやめて、しっかりと人と人として向き合っていこうと思った。

少々辛辣な感想であるが、全国の様々な地域から集まってきている大学ならではのクラスの様子を如実に表している。当然ながら一人ひとりの学習経験の濃淡があり、獲得している知識の量も違う。その違いが、大学で学び合う醍醐味にもつながっている。

私は広島出身で「平和と人権」というテーマは他人ごとではない自分のテーマだと思いました。今までなんとなく８月６日午前８時15分に原子爆弾が落ちたと学び、それが普通なことだと思っていました。しかし、先生に「広島の原爆について教えて。」と言われ、いろいろな思いがあり、たくさん話していたら、まわりから「すごい」って声がぼそっと聞こえました。その時、当たり前のことではないんだなと思いました。

小さい頃から学校の先生が一生懸命説明していたこと、それが私にとったら普通だと思っていましたが、一歩外に出るとそうではなかったことをこの授業を通して知りました。

私は、広島に生まれてよかったと心からそう思います。今まで学んだこと、すべてのことが生かされていると思いました。－後略－（３年Ｂ）

この話を受けて沖縄出身の学生が、沖縄慰霊の日（６月23日）について語った。この日は学校が休みになり、正午になると、どこにいても慰霊碑の方角

に向って合掌（ドライバーも路肩に車を寄せて合掌）をすることや、本人も授業のない時は、沖縄の方を向いて合掌しており、大阪に出てきてから、沖縄だけの取り組みと知ってびっくりしたという内容であった。話を聞いた周りの学生もまた驚いていた。

このように、互いのこれまでの人権学習の経験を交流し合うことで、各地域の特色ある人権学習の取り組みを知り、それぞれの学びの在り様に刺激を受けることができる。

また、ちょっとしたきっかけがあれば、自分の経験した人権学習を語り出す学生の姿から、これまで経験した人権学習について肯定的にとらえているという印象を持った。実際、「人権問題論」を受講する動機に、人権について関心があるとか、もっと学んでみたいということが多かった。

一方、多くの学生が「社会に出るにあたって今の自分でいいのか、社会人として通用するのか、人を傷つけないでうまく付き合っていけるか。」などという漫然たる不安を抱えているのも事実である。また、小・中・高等学校で学んだ人権学習を大事な学習と理解はしているが、人権問題を十分理解していない自分を否定的に捉えている（思い込んでいる）学生も少なからずいる。いざ社会に出るにあたり、そんな自信のない思いが強くなっているのかもしれない。

小・中学校の頃、人権学習は先生の話を聞くなど受け身の感じがありました。しかし、大学では自ら人権について学びたいと思いこの授業を取りました。なぜ学びたいと思ったかというと、人権についてまだまだ知らないことばかりで、このまま社会に出ていいのかという思いがあったのと、自分もどこかでハンディキャップのある人などを差別していて、その意識や偏見を変えたいと思ったからです。－後略－　（４年Ｃ）

（２）学び直し

私にとって人権を学ぶ意味は、小・中学校の時に学んだ人権を、今、大学

で学び直すことで自分のことを見つめ直すことができたり、人のことを考えたいと思えるようになったり、自分の成長を感じさせてくれたことです。

一番身近なことでは、在日外国人の話でK-POPなど韓国好きなことを周りに話した時、年配の方で「あんな人らの何がいいんや。」などと嫌悪感を示す人がいて、在日の方の前ではもっとあからさまに嫌悪感を示すのではないかと心配になったことです。

以前の私だったら、差別はダメとわかっていても、なんとなく他人事と捉えていたが、その時、自分ごととして何か行動したいなと思えた自分にとても驚きました。昔より人権感覚が身についたのかなと思えました。－後略－（３年Ｄ）

小学校や中学校で、いじめや戦争、差別問題などについて学んだ記憶があります。当時と現在では、考え方や受け取り方も異なるのではないかと思います。かつては、怖いなど良いイメージを持っておらず、どうして人権問題について学習する時間が設けられているのか、考えたことはありませんでした。しかし、今では、人権を学ぶことの意義や必要性を理解することができます。－後略－　（３年Ｅ）

多くの学生が、大学で人権課題について考えることで理解が深まり、あらためてこれまで経験した人権学習の意義が理解できたという感想を持っている。これまでの学習により得た個々の知識が、自分なりの人権という概念で関連付けて整理できたようである。それは、すべての人権課題を深く理解したということではなく、学生なりの人生経験から自身にとって一番関わりのある課題を、自分ごととして深く考えたことで、他の課題の内容の捉え直しにもつなげていったと考えられる。

授業を受ける前は、人権について誰かと意見を出し合ったり、クラス内で意見を交流したりすることは面倒だと思っていました。しかし、今となっては、答えがあるようでないような、そんな人権についての学習は、とても大

切な事だなと強く思っています。

私にとってこの外国語大学でいることは、現在社会を生きる必要な知識を得るためであり、自己を認める作業だと思っています。様々な人権学習を受けてきましたが、やはりどこかで（人権問題について）自分でなくてよかったと思うことはありました。表面的な善い人を演じているんだと勝手に自己解決していましたが、意見交流を通じて、その内的葛藤も含めてより深く人権について学び、自分とその問題とのかかわり方をつかむことだという気づきもありました。（中略）自分の存在を提示しつつ、相手の存在と交流し合うことは、これからの未来に種をまくような、より良い社会を生み出す一歩だと思います。　（４年Ｆ）

本講義では、ペアワークを中心とした話し合い活動によって、各人権問題に対しての受け止めや解決方法など、いわゆる正解がない課題に対して納得解を見つける場面を多く設定している。

大学生にもなると、これまで様々な人生経験を積んできており、Ｆのような内的葛藤も多かれ少なかれみんなが持っている。

私は、父親が在日韓国人で日本人の母親と結婚をして、ハーフですが、今まで自分の周りが、私が韓国と日本のハーフと知った時、どう思うだろうと気にしてきました。実際、私自身は差別や偏見を受けたことはないですが、母親から父親と結婚する時に周囲に「韓国人と結婚するのはあり得ない。」と反対された話を聞いたことがあります。ヘイトスピーチも聞いたことがあります。－中略－

私たちの世代で、実際に差別や偏見に直接つながるような経験をした人は少ないと思いますが、自分が韓国人の親を持つ身として、今後、結婚を考えている人と出会った時に、母のような経験をするかもしれないと考えると少し悲しい気持ちにもなります。

韓国人が日本に悪いイメージを持つのもそうですが、国籍等に関係なく人ひとりとして差別や偏見が無くなればいいと思います。（４年Ｇ）

Ｇはその大好きな父を昨年亡くした。臓器移植が必要な大病で、Ｇもレシピエント候補だったが適合せず、時間ばかりが過ぎ、父が亡くなった時は、悲しくて自分を責めたそうである。

“命の尊さ”の授業の時、Ｇは自分の経験から迷わず臓器提供に同意する立場をとるのだが、ペア学習のパートナーの「自分は同意するが、家族や自分の子どもの臓器は提供したくない。」という意見にも共感する。そんな自分に悩んだ結果、家族とあらためて話し合うとのことであった。

Ｇのように、本学には留学生のみならず様々なルーツを持った学生が在籍しており、キャンパスは豊かな出会いの場でもある。

大学に入り、しばらくしてクラブのみんなと仲良くなったころ、同級生の友達の一人が私に、実は自分は韓国人であることを打ち明けた。彼は、日本語しか話せないし言われるまで気付かず信じられなかった。○○○という韓国名を持っているということであって、身のまわりにもそんな人がたくさんいて、決して他人事ではないということに気付かされた。

彼が韓国人だと知る前と後で、彼との関係性や接し方が変わったわけではないが、今回の授業で学んだことから考えると、言わなければ絶対に知られないのに、いったいどんな気持ちで打ち明けたのか。また、その時、特に自分は何もせず何も言わなかったが、本当にそれが正しかったのか考えた。その後、彼とは、今まで通り呼び合い仲良くしているので思い過ごしならよいのだが、ひょっとしたら、韓国名で呼んでほしかったのかもしれないし、何か相談があったのかもしれない。もう少し考えて何か言ってあげればよかった。

この先、同じようなケースや在日の方と接する機会は必ずあるだろう。そんな時、絶対に彼らのアイデンティティを否定せず、理解できるよう知識を深めていきたい。　（３年Ｈ）

地方から大阪の大学に進学し在日韓国人の友だちと出会ったＨが、日本と朝鮮との歴史的経緯と現状をあらためて学んだことで、人権問題を自分ごと

として考える契機になり、あらたな葛藤が生まれたようだ。

本学の学生の半数以上が、奨学金等何らかの支援を受けながら学業に励んでいる。多くの学生が、卒業と同時に返済がスタートし経済的にはマイナスのスタートとなる。自分の置かれた環境をどう受け入れるかが、今後の人生に大きな影響を与える。

また、自分のことではなくても、親友が経済的理由で進学を断念せざるを得なかったなど、身のまわりの様々な貧困問題に気付いており、「子どもの貧困問題」は、学生自身のリアルな課題となっている。その貧困の連鎖を断ち切るためには、教育の役割が大きいことを、実感をもって語っていた。

「子どもの貧困」に関しては、私は、少しはそういう環境で育ってきて苦労してきたと思っていますが、そのおかげで手に入れられたものはたくさんあって、そのような環境で育つのは悪くないと思いました。

苦労したのは、やはり、大学に行かせてもらうかどうかです。今まで、兄や姉のお下がりで生活し、高校で学年上位をキープし指定校推薦で行ける成績なのにいけない悔しさに、私は、母に激怒しました。私の家は、母子家庭の三人兄弟だったので、奨学金を借りても大学に行くことは困難でした。当時、高３の私は、母にこう怒鳴りたかったです。「タバコや酒を買いまくってるんやったら、学費のほうにまわしてくれや。」と。
子どもの立場でそのような甘えは言えませんでした。

そのせいで、やりたいことの意欲は薄れ、自信はなくなっていきました。しかし、周りの人達のおかげで大学にも行くことができたし、自立心を持つことができ、忍耐力がつき、さりげないことで感謝するようになりました。貧乏だったからこそ、幸せや、手に入れたものの価値は大きいと感じました。もし、大学に行っていなかったら、価値観や人間性は大きく変わっていたと思います。私に子どもができたら…－後略－（３年Ｉ）

このように、生まれた環境によって、子どもの可能性が奪われることはあっ

てはならないことである。部落差別をはじめとする様々な人権問題の解決についても、教育の在り方が重要であることを、学生自身の経験が物語っている。

同和問題については、小学校の時に初めて学んだ。私の地元の近くが部落だったので、学校全体でその部落の施設に行って、地域の人たちとうどん作りをやったことがある。小さな小学校だったので、すべての学年が、差別を受けてきた高齢者の方と接する機会を持てた。“差別”という言葉は、おそらく学校生活の中でよく耳にするものである。

しかし、私が経験したような、実際に差別を受けたことがある人と関わりを持つことを小・中・高校時代に経験することはめったにないと思う。実際にそういう人たちと接することで、いかに差別が人を苦しめているのか、解決しなければいけないものなのかが手にとって分かると思う。人の痛みを知ることで、小さな差別から同和問題といった大きな差別も解決することができるのではないだろうか。　（４年Ｊ）

－前略－　私は、同和問題だけでなく、様々な差別を学校の授業で取り扱っていけば、少しずつ差別の考えは変わっていくだろうと思います。しかし、日本では、一部では私の地域のように小学校の時から何回も授業をしているところがあります。だけどいっこうに差別の意識は変わっていません。

ではなぜ、教育を受けているのに変わらないのだろうと考えた時に、改善すべき点は、先生の意識だと思います。教える先生は部落差別についての知識は知っているが、それを伝えるだけであって、その知識だけでよい方向に向けられないのが事実だと思います。

私が小学校の時に、毎年、部落差別の勉強をしました。これはよいことだと思いますが、あくまで学校の方針です。私は、３人の先生に教えてもらいましたが、熱意は全然違いました。この先生の熱意によって、教えてもらう差別の考え方も大きく変わって、より良い認識の知識を持つことができるようになると思います。“教育による正しい認識”を伝えるためには、先生か

ら児童・生徒にだけでなく、先生に対しての教育もしっかりしなければならないと思います。　（３年Ｋ）

差別は、人と人との関係性の中で生み出される。いくら制度的な側面を整えても、人の立ち振る舞いや内心など人格面の在り様が、解決に向け大きな要素になってくることにはかわりない。Ｋは経験を通してその重要性に気付き、教育に期待を寄せている。

（３）行動へ

大学生は“確立した個”として人権問題に対峙し、行動へと移せる世代である。

一方で、人権課題と向き合うとき、理想と現実のギャップに悩むのもこの時期である。電車で席を譲りたいが声をかける勇気がないといった自分の中の小さな迷いから、信頼している家族との人権意識の違いへの悩みなど、様々な葛藤の中で生活している。

そんな時期に、あらためて人権問題について正しい情報を得ることと共に、キャンパスで学ぶ仲間と様々な価値観を交流し合うことは、具体的行動へつながるきっかけとなる。

今までの授業をふり返って、最も印象に残っていることは同和問題である。その言葉自体初めて聞いた私は、とにかく理解しようとした。

しっかり理解した後、家に帰り、親に「同和問題について知っている？」と聞くと、ひどいことに親は、（部落について）偏見の目で見ていた。

私は、ショックを受け、知っている知識を活かして何とか親を説得しました。ありがとうございました。　（３年Ｌ)

－前略－　今またこのような授業を受けて、詳しい情報などを知って、授業の間だけでなく、私生活の時でも人権という事を深く考えるようになりま

した。それに加えて自分の性格にも影響が出始めています。
－中略－　自分から外国人に声をかけ道を教えてあげたり、電車で年寄りの人に席をゆずったり、友だちに変わったと言われるぐらい人権・差別・偏見ということを考えるようになりました。　（４年M）

（4）自分発見（とらえ直し）

Mのように友だちに指摘されるまでもなく、メタ認知能力が発達している時期だからこそ自分の成長を自覚し、新しい自分を発見することで，社会へ出る自信につなげていくことも可能である。

自分の中で何か変化があったのか？と問いかけてみても、特に、これと言って何か思いつくわけでもありません。しかし、周りを見ていて、ふと疑問に思ったりするようなことが増えました。電車の中で…（中略）に気づくのです。それをどう行動に移し訴えていくのかはわかりませんが、先日の北九州の豪雨の時には、（ボランティア等何ができるのか）福岡県庁に電話をさせていただきました。自分が身近に感じないからこそ、いざというとき気が付けなかったり、おろそかになってしまったりするようなことが少しでもなくなっていけばと思う度合いが強くなっているのは、もしかしたら私の変化かもしれません。　（４年N）

私は、自分は創造性がなく言われたことしかできないような、どこにでもいる人間だと思っていました。しかし、人権の授業を通して、人より一つひとつの言葉を深く考えることができて、人と視点が違うことが分かり、自分の自慢できる部分を持つことができました。
よく周りに言われていた「言葉を深読みし過ぎ。」「ちょっと変わってるな。」という言葉は、言われるたびに私が私自身を嫌になる原因でもありました。
しかし、この授業では、作品（「ほんまの『自立』って何やろね？」）を読んだ時、「口でも歩けるんや。」という言葉を深読みして「その人の生き方を

一言で表していると思う。」と他の人達と違う視点で発表したにもかかわらず、受け入れてもらうことができ、「これが私やん！」と思えました。また、法律（世界人権宣言）を、自分の言葉に直した時も、友達にアドバイスすれば少し取り入れてくれて、「私、創造性あるんかな！？」と自信を持つことができました。－後略－　（３年Ｏ）

この講義を通して、自分はあまり人権に関して理解がないという考えが少し変わりました。また､そのことで自分が嫌になる気持ちが楽になりました。

以前までは、私は「人権」と聞くとどうしても難しく考えすぎて、人権に対する理解がないのだと思っていました。しかし、本講義では、震災、いじめ、環境問題などの身近な問題が人権とつながっていることに気付くことができました。

授業内では私が今まで学んだり考えたり、小・中・高校や大学の授業の一環として学んだこともたくさんありました。自分の周りを取り巻いている一つひとつのことが意外にも人権と関わりがあり、あえて難しく考えて敬遠する必要がないと思えるようになり､学んだ甲斐があったと思います。（３年Ｐ）

（5）まとめにかえて

以上のような学生の姿を通して、大学で人権を学ぶ（学び直す）意義について、以下のように整理してみた。

①これまでの小・中・高校等での人権学習や人権課題との出会いの経験を整理し、自分なりの人権に対する価値観を再構築できる。

②その際、全国各地域の取り組みの交流が可能になり、視点が広がることで、人権という普遍的な文化としての捉えにつながる。

③また、社会のグローバル化に伴い、人権問題の解決に向けては、知識・理解に加え、人権感覚など人格的側面が、さらに重要となっていることが実感できる。

④実感を伴った理解により、自らの力で一人の大人として行動に移せる環境

をつくりやすい。

⑤自分意識や行動の変容を客観的にとらえることで、自尊感情がたかまりそれが自信となって、社会参加しようとする意識が高まる。

５．おわりに

たった１年の大学教員の経験からではあるが、小学校教員を経験してきた私にとって、本学生の人権問題を素直に正面から受け止め考えようとする姿勢は、大変刺激的であった。あらためて、各地の地域性を生かした様々な人権学習を経験した学生が集う大学の役割は大きいと感じた。社会に出た学生が、人権問題について、自分の言葉で語ってほしいと願っている。

近年、人権が尊重された社会の実現を目指し、法的整備が進みつつある。特に、「障害を理由とする差別の解消に関する法律」（2016.4施行）、「本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律」（2016.6施行）、「部落差別の解消の推進に関する法律」（2016.12施行）は、個別の人権課題に係る“差別”の解消を目的とした初めての法律であり、その意義は大きいと考える。三法に共通して求められているのが、教育と啓発の必要性であることから、益々、差別解消に向けた教育の重要性が高まることになる。

今後、各自治体では、人権教育プランなどの充実・見直しが進められ、学校教育においても人権学習のさらなる工夫改善が求められることが推察できる。ラグビー・ワールドカップやオリンピック・パラリンピック、万博の誘致なども弾みになり、人権教育推進の新たなステージに入ると考える。

差別解消三法世代の学生を迎える準備が急務となってくる。

参考・引用文献

「人権教育のための国連10年（1995年～2004年）行動計画（仮訳）」外務省
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jinken/kyoiku/pdfs/k_keikaku3.pdf
（2018年１月４日閲覧）

「高校生の生活と意識に関する調査報告書」国立青少年教育振興機構,2015
http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/98/
（2017年12月26日閲覧）

「人権教育基本方針」「人権教育推進プラン」大阪府教育委員会, 1999
http://www.pref.osaka.lg.jp/jinkenkyoiku/houshin/
（2017年12月26日閲覧）

森実『知っていますか?人権教育一問一答』第２版　解放出版社, 2013